

V 都市スケールのデザインの経緯

1. アメリカ合衆国・ワシントン DC

- ・1790年10月 ワシントン大統領は首都設置法にもとづき、ポトマック河畔の森と原野だった場所に首都建設を決定
- =1800年12月に遷都を予定、それまでに連邦政府の国会議事堂、大統領官邸、政府機関を建設
- ・トーマス・ジェファーソン国務長官 (1789~1793) による提案
- ⇒運河に沿って格子状街路を基本、東に国会議事堂、西に大統領官邸を配置し、両者を Public Walks (モール) でつなぐ、面積約 600 万㎡
- ランファンは中心部のみならず市域全体の計画を提案
- =建築家 ピエール・ランファン (フランス人) 1791年3月~6月 首都計画策定
- 協議と修正を加え、8月19日発表「アメリカ合衆国の恒久的政府所在地となる都市の計画」
- ・格子状街路と放射状街路の重ね合わせを骨格に、放射状の軸線を強調、交点を広場とする
- ・国会議事堂と大統領官邸を核に東西軸と南北軸を設定、交点に記念碑(「騎馬上のワシントン」のモニュメント)を設置する
- ・中央の国会議事堂から記念碑に至る東西の軸線を幅員 400ft (120m)・延長 1 マイル (1600m) の グランド・アベニューとする
- ・グランド・アベニューに沿ってポトマック川から東のアナコスティア川までの運河を開削する
- ・街路は幅員 160ft (48m) の広幅員街路、130ft の幹線街路、90~100ft の街路に分類する
- 委員会は土地売却のために、ランファンに 1791年10月までに計画図を印刷するよう命じた
- ランファンは拒み提出せず →委員はエリコットに作成を命じる
- ランファン案に近い計画図を作成、1792年公表(ランファンの名はなし)
- ランファンが激怒・委員会はランファンを解雇
- ・1800年秋 連邦政府はフィラデルフィアからワシントンへ遷都
- 国会議事堂は未完成 →完成は 1863年(南北戦争中)
- 運河は 1810年着工 1815年完成 →舟運発達せず
- ・1871年 連邦議会は都市基盤整備のためのワシントン市公共事業委員会(5名)を市長の下に設置
委員会副会長アレクサンダー・シェファード中心に実施
- 街路舗装、上下水道の敷設、ガスの敷設、街路樹の植栽を計画(予算 625 万ドル) →公債 65%、
残りは受益者負担
- ・1873年 工事費は 3000 万ドルに達し、財政破たん、連邦議会は委員会の廃止を勧告
- 1873年から合衆国陸軍工兵隊所管となる
- ・1900年(遷都 100年)が近づくころ
- 記念事業として中心部の整備の機運が高まる
- 1893年開催のシカゴ・コロンビア博覧会の影響
- 当時は土地利用の混乱が極まっていた(モールの中央部を鉄道がはしり、国会議事堂の下は植物園)
- ・合衆国陸軍工兵隊は 1900年12月記念式典に向けて改良計画を発表(ランドスケープ・アーキテクト
のサミュエル・パーソンズ設計)
- 大統領官邸と記念碑(ワシントン・モニュメント)の軸線は無視、欠陥が多い

→反対運動 (都市全体との調和に欠ける)

- ・1901年3月 上院議員ジェームス・マクミランを委員長とする「首都改良委員会」発足
 - ・ダニエル・バーナム (建築家) →都市美運動
 - ・フレデリック・ロー・オルムシテッド・ジュニア (ランドスケープ・アーキテクト)
 - ・チャールズ・マッキム (建築家)
 - ・アウグストス・ゴードENS (彫刻家・シカゴ・コロンビア博覧会で活躍)

→1902年1月報告書「コロンビア特別区のパーク・システムの改良について」を提出

→ランファンの原計画に沿って展開を主張

→官庁街計画、河川改修・橋梁の設置計画、鉄道の移設と駅舎の建設計画、公園緑地系統計画 (都市計画全般)

→巨額の費用 (2億~5億ドル) のため消極的対応

- ・1924年 首都公園委員会設置 (計画の実施組織)
- ・1930年代 ニューディール政策による公共投資の拡大でようやく着手

2. アメリカ合衆国・ニューヨーク

- ・1788年9月13日、ニューヨーク市は憲法制定会議によりアメリカ合衆国の首都となる (1790年まで)
- ・1811年 マンハッタンの将来の都市計画と土地販売についての案をまとめた「1811年委員会計画 (Commissioners' Plan of 1811)」がニューヨーク州議会を通過。ガバヌーア・モリス、ジョン・ラザファード、シメオン・デ・ウィットら3人からなる委員会がまとめた計画は、土地の起伏にかかわらず格子状の街区を設け、1番街から12番街までの南北方向のアヴェニューと1丁目から155丁目までのストリートが直交する規則正しい道路網とその幅員が定められた。

3. スペイン・バルセロナ

- ・イルデフォンソ・セルダ (Ildefonso Cerda)
 - =政府からの委託研究であった、都市整備拡張計画の基礎調査としての地勢図の作成と計画案
 - =「都市計画原論およびバルセロナの整備拡張へのその原理の適用 (1867年刊行)」
 - =Urbanizacion (書名を「都市計画」と名付けた)
- 都市の原理を探求・人間が住まうことを都市の原点にすえ、都市の実体を滞留と移動の概念に還元した
- ・通称「プラン・セルダ」(1859年) =正方形に近い「グリッド・パターン (格子状)」の街区
- 方位に配慮した格子状の広幅員 (20m) 街路で均等に分割
- 施設の均等な配置計画により補完

4. オーストラリア・キャンベラ

- ・1901年1月1日 オーストラリア憲法が發布され、イギリスから6つの植民地が独立し、現在の6州からなるオーストラリア連邦が誕生
- ・首都を設置することになり、2大都市間 (シドニーとメルボルン) の首都争いの打開案として、ほぼ中間地点のニュー・サウス・ウェールズ州内の土地に首都を建設することを1908年に憲法で決定した。40以上の候補から上院・下院の投票により決定

- ・首都区域の現地踏査と区域確定、建設予定地の選定のため、連邦政府の測量官チャールズ・スクリプナーが現地に入り、建設予定地としてモロング川のキャンベラ溪谷一帯が選ばれた（なだらかな丘陵のブッシュ地帯と奥深い森林地帯・水源確保のため）
- ・1911年4月 連邦政府は新首都の都市計画の国際コンペを発表
- 新国家の存在を都市計画によってアピール
- 「この都市は世界で最も素晴らしい首都でなければならない」と所管の内部大臣が発言
- コンペの資料は「地形図（等高線図）」「雨量記録」「建設予定地の背景画」のみ
- 国内およびイギリス、フランス、アメリカ、カナダ、南アフリカなどに送付された
- 137点の応募作（バーリー・グリフィン案が多数の賛同を得て1位に）
- =計画案・グリフィン・プラン
- ・1912年5月 グリフィンが一等賞となり、設計と建設のディレクターに任命された。
- 1910年代 連邦政府は頻繁に政権交代し、首都建設に対する方針や姿勢が一定せず、政争となった
- 政府高官や官僚、地元建築家がグリフィンに反感
- コンペ実施後 内務大臣オマリーはグリフィン案をそのまま実行せず、入選案をいくつか組み合わせた実施案を担当部局につくらせた（1912年末自画自賛案策定）
- 1913年 グリフィンは連邦政府から担当技監に任命されたが、権限が不明瞭で内務省と対立
- 1916年 内務大臣に再任されたオマリーはグリフィンを後押しし、実施案の作成が急がれたが、内務省は協力せず、1920年に辞任（解職）された
- ・1925年 グリフィンの当選案を若干修正した計画を告示
- 1930年代以降 世界大恐慌、第2次世界大戦のため停止状態、グリフィン・プランから逸脱した開発が多発
- 1954年 ロバート・メンジズ首相が首都建設の実施に主導力発揮
- 1957年 首相は政府から独立した強力な首都建設機関「連邦首都開発委員会（NCDC）」を設立
- 1988年 NCDC 解散、この間に急激に都市建設と政府機関の移転が進んだ（人造湖の建設が象徴的）
- ・グリフィン・プランの特色
- ヴィスタとして「地の軸（Land Axis）」と「水の軸（Water Axis）」を設定し、直行・並行する「都市の軸（Municipal Axis）」を設け、これらの軸を市街地構造と土地利用の背骨・骨格とする
- 3つの軸線を中心に幹線道路、広場、公園、主要建築物を明解に、シンボリックに配置する
- 全体を円形劇場と見なし、正面と側面の丘を天井・床敷、水面に向かう傾斜地を客席、湖は競技場、階段舞台は政府庁舎で区切られ、山頂までひな段となり、かなたの山から日が昇り、劇場全体の背景となるよう設定
- 水と緑を都市の根幹的な社会資本とし、緑地を保全・創造した。モロング川をせき止め、市街地の中央に人造湖（バーリー・グリフィン湖）を創造した。
- ・1950年代以降 政府機能の移転と都市建設が本格化
- ⇒都市は拡大しつつも、グリフィン・プランを継承し 田園都市の思想が実現



5. ブラジル・ブラジリア

- ・ジェトゥリオ・ドルネレス・ヴァルガス大統領 (1930～1945、1951～1954) の改革でリオ・デ・ジャネイロの国立美術学校学長に 1931 年建築家ルシオ・コスタが就任
- ・1936 年 コスタの努力でル・コルビジェがリオに招かれた
- 文部省の新庁舎の設計を 4 人の建築家グループであたる (リーダー：ル・コルビジェの理論による近代建築の適用)
- ブラジルのリーダー的建築家に多大な影響を与え、建築の社会化の流れをうけ、合理主義、機能主義、コンクリートの造形美などのブラジル近代建築の原型が定着
- ・1956 年 ブラジル大統領となったジュセリーノ・クビチェック (任期：1956. 1. 31～1961. 1. 31) はリオ・デ・ジャネイロにあったブラジルの首都を国内の中心部に移す計画 (「50 年の進歩を 5 年で」をスローガン) を選挙公約としていたことから、何もない荒野の建設予定地で自ら建設工事を指揮し、計画通り 1960 年 4 月 21 日に遷都を行った
- 荒野の中に、わずか 3 年で近代的な未来都市が造られ、わずか 38 年間で世界遺産に指定された
- ブラジルはこれをインセンティブとして国をあげて工業化を図り、全国的な近代化を進めた
- ・クビチェック大統領は、新首都建設のために「連邦新首都建設公社 (NOVACAP)」を設立し、チーフアーキテクトにオスカー・ニーマイヤー (コスタの弟子) を任命、ニーマイヤーは都市計画デザインを決めるための「新首都パイロットプラン・ナショナルコンクール」を提案しコンペを開催
- ・1956 年実施のコンクールにリオ・デ・ジャネイロ国立美術学校 (建築学部も含む) 学長・ブラジル人建築家・都市計画家のルシオ・コスタが参加し、彼特有のフリーハンドのスケッチによる都市計画案が採用された
- ・コスタ案はテキストとスケッチが呼応し、ル・コルビジェの都市論に準拠するシティ・プランニング的な説得力と、それによって生まれる建築空間のイメージが適切に表現されていた
- ただちに実施案としてまとめられ、コンペ終了 3 年後の 1960 年 4 月に完成式を迎えた。コスタ案の三権広場を囲む司法、立法、行政府、各省庁の建物、大統領官邸、カテドラルなどほとんどすべてがオスカー・ニーマイヤーにより設計されている
- ・完成後の評価：赤土の荒涼とした草木も育たぬ風景、リオからの移転を拒む役人、計画都市を嫌いスラムが自然発生、不必要に広すぎる道路、自動車優先の非人間的都市、娯楽のない退屈なまち
- 今日：マスタープランはおおむね完成、緑化が進み、ル・コルビジェの理想都市を忠実に現実化した。1987 年世界遺産登録 (建設後わずか 38 年)